

1 幼・保小中12年間の連携

子どもたちが、高浜市のよさを感じながら、心豊かに成長・発達するために12年間の学びと育ちをつなぐ、「異校種間の連携教育」を推進する。教職員間の情報交換会や異校種参観により、互いの教育観や指導法への理解を深める。共通の目標を掲げ、指導がとぎれないようにつなげる教員の意識をさらに高める。

2 確かな学力の向上

(1) 教師力・授業力の向上

アクティブラーニング、ICTを活用した授業実践、外国語のCAN-DOリストの活用・改善、ALTや英語専科教員の活用、スクラッチや自律型ロボットを活用した高浜版プログラミング学習の先行モデル授業などを進める。また、学校司書を小学校に配置し、図書室を「本で学ぶ場」として整備していく。

(2) きめ細やかな指導の充実

少人数指導やチームティーチングの充実を図るとともに授業方法を検証し、効果的な指導法について追究し、個に応じた学力の向上を図る。そのために必要なサポートティーチャーや外国人指導助手(ALT)の配置を継続して行う。

3 一人ひとりを大切にする教育

(1) 特別支援教育の充実

保護者と教職員が個別の教育支援計画を共有し、医療や福祉サービスなど関係機関と連携しながら学校と家庭が歩調を合わせて個に応じた支援をする。各校には、特別支援教育コーディネーターの役割を位置づけ、自校の体制について見直し、改善を進めていく。また、幼保小中だけでなく、高等学校と連携し、個別の教育支援計画の引き継ぎと活用を進める。

(2) いきいき広場福祉部との連携

こども発達センターの専門職と教育委員会の専門家が、小学校区ごとにチームを組み、各園・学校を巡回訪問し、具体的な支援について助言を行う。関係各所が連携し、多様なニーズに応えるように、子どもや家庭を見守り支援する。

(3) 相談活動・学習支援の充実

こころの相談員が、適応指導教室「ほっとスペース」のほか、各校を訪問して子どもや保護者、教職員の相談を行う。スクールヘルパーを中学校に配置し、学校不適応をおこしている生徒の学習支援や生活支援を行う。また、スクールカウンセラーを定期的に学校に派遣し、児童生徒や保護者の抱える悩みを受け止め、心のケアをする役割を果たしていく。

(4) 外国人支援教育の充実

外国籍の児童生徒を対象とした早期適応教室「くすのき学級」や各校の日本語指導教室において、日本語や日本の文化・習慣が理解できるように支援する。また、通訳者が不在な場合でも、支援を必要とする子どもや保護者に対応することができるように、音声翻訳機を各校へ配備している。

4 地域と協働する学校

学校を「学びの拠点」とし、地域の活動を行う場、地域住民が授業や学校行事などをとおして、子どもたちと交流する場となるように努める。高浜カリキュラムの実践や各種学校行事では、地域の「ひと・もの・こと」を大切に、地域と共に活動し、ともに学ぶ機会を積極的に取り入れる。また、高浜版プログラミング学習においては、たかほま夢・未来塾や愛知教育大学と連携し、カリキュラムやワークブックの作成を進め、子どもの学びを支援する。

特に、この春に竣工する新高浜小学校においては、地域交流施設を併設し、「大家族を縦横に繋ぐ架け橋」となるためのモデル校として役割を果たしていく。

5 安全で快適な教育環境

子どもの学びの場・生活の場として、また、地域コミュニティの拠点として、市民にとっての学び舎となるために、教育環境の整備を計画的に進めていく。明るく過ごやすく、学習に集中できる教室環境を整えるために、照明のLED化を順次進めていく。さらに、全小中学校の教室にエアコンを設置する。

また、高浜小学校の水泳授業において、民間プールを活用することに伴い、その運用や水泳指導カリキュラムなどについて、実践をふまえて改善する。校舎等の老朽化に伴う改修や修繕については、公共施設総合管理計画を基本として計画的に予算を配当し、長寿命化を図るために速やかに対処していく。教育のICT化を推進し、小中学校に整備したタブレットを有効に活用するとともに、電子黒板、大型モニター、デジタル教材等の充実を図り、子どもが学習に興味をもち、積極的に授業に臨むことができる環境づくりに取り組む。